

おかげ  
さまで

## 日之影新聞

第7号

藁と  
わら

生きる

すつと、  
暮らしそばに

藁細工づくりを生業として生きる若者が日之影のまちの奥に暮らしている。「工房たくぼ」の藁細工職人、甲斐陽一郎さんだ。日之影の農業を受け継ぎ、田んぼで稻を自ら育てながら、農家としてもなく藁細工職人として歩むことを志し、ひとり(正確には仲間たちと)道なき道をゆく挑戦者である。

仕事場にはこの日5人ほどの職人さんがいて、みんな一心に藁に打ち込んで黙々と作業をつづけていた。地べたに腰を下ろし、せつせと手足を器用に使っている。この土地で育ったこの土地の藁で、この土地の藁細工を編んでゆく。少しずつ少しづつかたちを成していくた。

いる。片手間でつくられた作品ではなく、ひとの暮らしへ寄り添うプロダクトとして昇華されているからだろう。工房の壁に掛けられたしめ縄は、内に静かな生命力を湛え、実に美しかった。それは、日之影の棚田に育ち、眩しいほどの陽の光をめいっぱい浴びた藁の最終形なのだ。



# 藁細工、田んぼの先の手仕事

藁細工は、藁からつくられるもの。

あなたはあたりまえのようにそう思ふかもしれないけれど、ではその藁はどこから来たものか知っているだろうか。またあなたは最近「藁」を見たことがあるだろうか。

昔から、その丈夫で柔軟な性質からものづくりの材料として利用され、閑散期の農家の手仕事となつて草履やほうきやしめ縄やいろいろなものにされた。元々はそこそこにあつた田んぼの稲の副産物としてどこにでもある珍しくもないものだった。しかし現代では、稲穂の収穫では当然のようにコンバインが使われ、稻の茎である藁は粉々に粉碎されてしまうから、綺麗なたちの藁を手に入れられることなど滅多にないし、

あなたが目にすることもほとんどないはず。それに、農業そのものを受け継ぐ人も少なく田んぼも減つている状況のなかで、藁細工の技を継ぐと考える人などいないのが現状なのだ。

大きな台風が立て続けにやってこようとしていたその合間の8月のあ

る日、日之影に眩いほどの陽射しが降り注いだ。陽一郎さんはその瞬間を逃さず青藁を刈りに行かねばならなかつた。もう一刻の猶予もなくらい差し迫つていた。というの

も、青藁は稲が穂をつけ茎の内側から姿を現す初期段階までに刈り取らねば使いのにならないからだ。独

特の香りと艶をもつ青藁を、陽一郎さんは飾り細工の原料として重宝しているのだ(他方、稲穂の収穫後に残された通常の稻藁は、艶と香りが



上から：工房たくぼの作業場にて。壁には様々な藁細工。／左が青藁、右が稲を収穫した後の藁。／藁の長さや大きさなど1本1本違うのだ。／若い移住者も、たくぼの仲間として共に働いている。

# 種もみから始まる、 永い時をかけたものづくり

インフォメーション

## わら細工「たくぼ」



左上から：暮らしの飾り物には青藁を使う。艶や香りがいい。／藁で編まれたスツールは人気商品。／地べたでの作業。腰や目にも負担がかかる。／青々とした棚田の風景。お米と美しい藁細工を生む、宝の大地。／右下：日之影ではどの家の玄関にも一年中しめ縄が飾られている。

陽一郎さんは、藁からではなく、種もみから藁細工をつくる。（こ）では農業はひとつつのプロセスだ。田植え、田んぼの管理、刈り取り、収穫、藁干し。農の営みだけでも十分大変なのに、藁細工づくりからすればまだ準備段階。さらに藁を選別し、乾燥させ、保存する。そんな手順を経てやっと準備が整う。それからようやく腰をおろし「藁で縄を編（な）う」という藁細工の最初の手仕事が始まる。緻密な藁細工がかたちづくられていくには、さらにどれだけ膨大な手間と時間が費やされることだろうか。工房立ち上げから5年。いま、

陽一郎さんの藁工房「たくぼ」の作業現場は、ほかには誰も真似すことのできない、唯一無二の価値創造の事業風景を生み出している。それもそのはず。日之影の棚田の風景を守ること。世界農業遺産にも認定された山間地の独特な農業文化を継承すること。神話が息づく日之影のまちの暮らしに結びつくこと。この土地に生きた陽一郎さんの祖父の手仕事の技を次代に繋ぐこと。そしてここに生きていいく自分と仲間たちの道を創造すること。そのすべてが、この手仕事に込められ、表現されているのだから。

かつて祖父がしていたという藁細工づくりを、孫である甲斐陽一郎さんが受け継ぎ立ちあげた藁細工専門工房。「たくぼ」とは昔から集落で呼ばれてきた屋号である。農業を當み自然と向き合いながら、原材料となる藁の調達も基本的にすべて自分たちでまかなうという、まさに「種もみを撒くところから始まるものづくり」を実践中。しめ縄や飾り物、縁起物、特注品など、昔からあるものだけでなく現代の暮らしにもフィットするものづくりにもトライしながら、受注生産を行なっている。



使える  
かなー」の

# 日之影方言教室

## 「旅の小話」



（訳）

こないだ、仲んじい女友達6人で、温泉旅行に行つてきましたよ。楽しかった。飛行機やら、新幹線やら、電車やら、バスやら乗り継いで、行ったよ。駅やらで道が分らんつなつたら、そこ邊におらす人を引っ捕まえち聞いて、歩き疲れたらよこて、ちいつとでん不安になつたら、また、そこ邊におらす人を引っ捕まえち聞いて、目的地の温泉旅館に着いたわ。みんな、優しゅう教えてくれたがね。毎回思うとよく！

旅館じゃ、みんなで、「ありがいいばい、こりがいいばい」って言いながら、子供やら、孫やら、友達やらに土産をいっぺこつ買つて。晩も朝も、うめえもんを腹うべえ食つて。あいさあいさに、らんも温泉に入つたよ。まゝ、髪やら肌やらつるつるして、美しいなつぱい。（誰もゆうちやくれんき、われがち言うけんどん）。ときがいいき、何でんねー話でん面白してね、ワッハワッハ！ 言うて、話も弾むとよ。

さ～れ、またみんなでお金貯めち、次の旅行を楽しみに頑張らざ!!

講師：日之影町役場 田斐賀奈子  
私は、根っからの日之影人。毎日、方言で町民のみなさまと会話をしています。

## 左近の逸品

右料理



## ヤマタロウガニ 塩ゆで

地元では「ヤマタロウガニ」とも呼ばれるモクズガニ。美しき五ヶ瀬川で採れたものをいただく。ヤマタロウガニの塩ゆでは、味も見た目も上海ガニといつしょ。左近のおじさん曰く「カニのなかでは一番おいしい」や小さいサイズであつたため、身をほじくるのはちょっとめんどくさいが、とにかく根気よく甲羅を分解していき、あとは口をつけてチューチューと吸つていくとカニの旨味が口中に広がります。まさに至福のひとときが訪れる。

居酒屋・左近

0175-409713-1800  
発行：日之影町 TEL 0982-0402  
宮崎県西臼杵郡日之影町大字岩井川339番地1  
87-3900（代表）企画：株式会社オズマピーアール  
写真：小板橋基希（akaoi）／デザイン：難波知子（akaoi）  
©hinokata. All Rights Reserved.

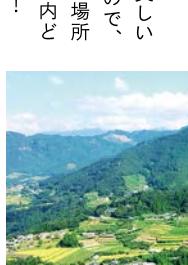
活動報告

## 緑のぶるさと協力隊が行く！

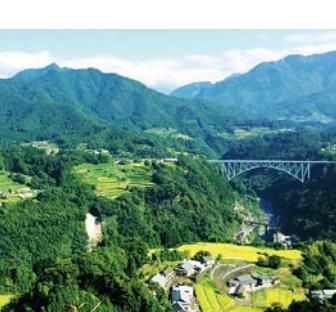
こなには、第25期「緑のぶるさと協力隊」の高橋直斗です！ 2018年の4月から日之影町に来て、もう半年が経ちました。生まれが東京で田んぼや畑に入った事が無く、農山村の暮らしを何も知らない僕にとって、農作業を初め、日之影町での暮らしは毎日が新鮮で、新しいことの連続です！

そんな日之影町では暮らしているだけで心が安らぎます。山に囲まれ、坂道の多い日之影町では、車でどこを走っていても開けた景色が多くあります。緑の深い山に透き通つ

ているだけでも、心が安らぎます。まだまだ日之影町の美しい景色を知りたいので、みなさんのお気に入りの場所を教えてくださいね！ 町内どこにでも駆けつけます。



た川、どこまでも続く棚田、それらの景色が季節ごとに色を変えるのです。移動中でも思わず立ち止まって見惚れてしまう景色がたくさんあります。そんな日之影町の中でも、僕のお気に入りの場所は大楠の展望所です。町場を一望できる最高の場所ですね！ 休みの日にお弁当と本を持って、絶景を前にのんびりする日もあります。



### 今月のおかげさま



おかげさまで、  
キャンプの季節に  
なりました。

日之影キャンプ村の管理人をする中

で、たくさんのお客様との出会いがあります。子どもが自然の中で大きいやぎする姿や、大人が童心に返つて遊んでいる姿を見ていると、こちらも元気をもらえて楽しいです。お客様に、「たのしかった！」と言つてもらえるように、思い出に残るキャンプ場をつくっていきたいです。

ただのり（63歳）



おかげさまで、日之影。